

## 戦後開拓地のライフヒストリー（3） —岩手上郷分村における「開拓二世」の女性たちのライフコース—

### A Life History approach to Postwar Reclamation (3) Life Course Patterns of Second Generation Women in Kamisato clearance, Takizawa, Iwate

高 瀬 雅 弘\*  
Masahiro TAKASE\*

#### 要 旨

本稿は、ひとつの戦後開拓地をフィールドとした聞き取り調査（ライフヒストリーインタビュー）に基づき、「開拓二世」の女性たちのライフコースにはどのような特徴がみられるのかについて考察したものである。そこで本稿ではまず、1940年代後半に長野県上郷村からの分村計画によって生まれた、岩手県滝沢市・岩手上郷分村に入植した人々（開拓一世）の子ども（開拓二世）ないしその妻である女性たちの、生育環境、教育経歴、職業経歴、生殖家族経歴をたどる。次に第一世代との対比から、世代間の相違と共通性を読み取る。そのうえで、彼女たちが第一世代から受け継いだもの、さらには第二世代固有の課題を、地域特性を考慮しながら明らかにする。本稿は、ライフコースと世代という観点から、「生きられた経験」としての戦後開拓を捉えようとする試みである。

キーワード：戦後開拓 世代 ライフコース 地域社会 共同性 女性

#### 1. はじめに

##### （1）問題の所在

1945年11月に策定された「緊急開拓実施要領」に始まる戦後開拓は、国家的なレベルでみれば、アジア各地を中心に拡散し、その後引き揚げによって帰国した人々や、戦災によって生活基盤を喪失した人々を再配置する政策的な試みであった。一方それは個人レベルでは、敗戦によってライフコースの立て直しを迫られた人々が、再設計した人生を賭すひとつの機会となるものであった。

政策的な観点から戦後開拓を捉えると、その時代とは広く見積もって1945年の「緊急開拓実施要領」に始まり、1974年に開拓農政が一般農政に吸収されるまでの30年間である。この30年という時間の経過のなかで労働力としてのひとつの世代は交代期を迎え、世代交代と政策的な転換とが重なり合うことで、戦後開拓地は、普通の農村となっていくことになる。

本稿の問題意識は、こうした「みかけ上」の変化とは異なった位相や論理が、開拓地の内側にはあるので

はないか、というものである。

戦後日本社会において、戦後開拓地は独特な位置を占めてきた。それは自然村のような、もともとその地域に住む人々によって構成された場ではなく、かといって相識関係の低い都市社会とも異なる。このような特徴をもつ場において、人々は戦後開拓をどのように生きてきたのか。こうした問いについて考察するうえで、本稿は2つの視点を設定する。

ひとつは「世代」である。戦後開拓地では「一世」「二世」という表現が多用される。このことが象徴するように、開拓地の人々には世代という意識が強い。それは世代間の相違や継承についての自覚となって表れる。そして「一世」「二世」相互の意味づけは、一般的な農村における「先代」といったものよりも重みをもつと考えられる。

もうひとつは「女性」である。本稿が対象とする戦後開拓地は当初、同郷で同世代、そして単身の男性によって構成された地域である。開拓当初は共同生活を送り、そこで築かれた関係性はその後も維持されていた。一方、入植者の妻となった女性たちは、それ

\* 弘前大学教育学部社会科教育講座

Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Hirosaki University

ぞれ別の地域から嫁いできた人々である。それは「二世」に関しても同様である。したがって、結婚によって地域の既存の人間関係のなかに新たに参入していくことになる。加えて、結婚を機に新たに農業に従事した人もいる。このように女性にとっての結婚というライフイベントは、地域移動、夫の家族や地域の人々との関係性の構築、新たな職業への従事といった形で、様々な移行をめぐる課題をともなう。

これらの視点から、次のような問いが喚起される。

ひとつは、「開拓二世」（以下では第二世代）は、「開拓一世」（以下では第一世代）をどのように捉え、何を継承していったのか、ということである。そしてこの問いに付随して、第一世代とは異なる、第二世代固有のライフコース上の課題とは何であったのかについても問う必要が生じる。

もうひとつは、第二世代となる女性たちの、開拓地への移行と適応はどのように行われたのか、ということである。そこには、彼女たち個々の相違やコーホート効果といった要素の他に、地域社会の特性も少なからず影響していたことが考えられる。

## （２）先行研究の知見と分析課題

近年、戦後開拓に関して充実した成果が蓄積されるようになってきている<sup>1</sup>。そのなかでもひとつのまとまった研究成果である『戦後開拓―長野県下伊那郡増野原一』<sup>2</sup>において、編者である森武麿は、戦後開拓研究の意義を以下のように述べている。

「戦後開拓」とは、ヒトの移動の視点から言えば、「日本帝国」の膨張から収縮の転換に位置し、収縮過程の始まりである。すなわち「外地から内地へ、そして内地から内地への移動」であった。これにともない国境を越えて、また故郷を離れて移動する人々の喜怒哀楽は、現在のわれわれにとって、はかり知れないものがある。<sup>3</sup>

森を中心とした共同研究は、綿密な史資料の分析に加え、オーラルヒストリーという方法を用いることで、文書資料に残ることが少なかった開拓農民たちの意識をすくい取っている。そのうえで満州開拓から引き揚げ、そして戦後開拓の展開に至るまでの経緯を、一連の過程（ライフヒストリー）として捉え、提示している。こうした作業を通して、開拓農民たちの「喜怒哀楽」を描出している。

戦後開拓は、戦後農政の流れに位置づけられ、その

政策動向に関する研究<sup>4</sup>が進められる一方、戦後開拓地を共同体論的なアプローチから考察する研究も蓄積されている。その嚆矢ともいえるべき蘭信三の研究は、「選択的」共同体という概念を設定したうえで、既存の村落共同体論とは異なる形のものとして戦後開拓地を位置づけている<sup>5</sup>。共同体論に近いアプローチとしては開拓地の営農を主導するリーダーとそれを取り巻くネットワークという観点からの分析<sup>6</sup>も蓄積されている。また戦後開拓地の展開を、若者が共同性のもとに一人前の経営者へと移行するライフコース上の過程として捉えようとする研究<sup>7</sup>、さらには入植のプロセスを社会関係資本の形成過程と重ね合わせながら分析した研究<sup>8</sup>も現れている。

このような形で、共同体としての性格や個人のライフコース、あるいはその集積としてのファミリーコースやコミュニティコースを明らかにしようとする試みが続けられている。ただしこれらの研究において、依然未開拓な領域として残されているのが、「世代」と「女性」である。

戦後開拓研究は、これまで第一世代に焦点化して進められてきた。これは第一に政策動向に規定された「時代」という側面によるところが大きい。そして第二に、研究者の問題意識というよりも、現在が第一世代の証言を直接聴くことができる最後のチャンスである、という事情がある。しかしながら、第二世代もすでに60代から70代に達しており、かつ第三世代による継承が不確実性を増す状況においては、第一世代からの世代間の関係性の分析は、今日的な課題になりつつあるといえよう<sup>9</sup>。

そして世代の問題と関連して、開拓営農の主体が男性であったため<sup>10</sup>に、開拓地における女性の存在や役割がこれまで十分に検討されることはほとんどなかった<sup>11</sup>。しかし第一世代が経験した、開拓地の過酷な条件は、女性にとってより厳しいものであった<sup>12</sup>。そうした女性にとっての困難さが、世代間でどのように変容していったのかということも考察すべき課題として残されている。

そこで本稿では、次の2つの分析課題を設定する。

第一に、第二世代の女性たちが生活する「開拓（地）」という環境が、それぞれのライフコースとどのような関係をもっているのかについて考察することである。生育環境、教育経歴、職業経歴、生殖家族経歴をたどり、そこに介在する要素としての「開拓」を捉えていきたい。ここでいう「開拓」には、職業としての酪農や農業といったことはもちろん、第一世代の

経験や、この世代が形成した地域社会のあり方といったものも含まれる。この課題に関しては、第二世代の女性たちの、第一世代とは異なるライフコースのあり方、および地域における関係性の位相を問うことになる。

第二に、第一世代と第二世代を対比した際にみえてくる、第二世代固有の課題を明らかにすることである。「二世」という自己の世代認識のなかで、第一世代による開墾とは異なった酪農や農業の経験を彼女たちがどのように捉えているのかについて考察する。この課題をめぐっては、世代間の対比を通しての「自画像」と、継承についての考え方というものを問うことになる。

以上の作業を通して、戦後開拓地の第二世代の女性たちは、第一世代の何を受け継ぎ、何を新たに手に入れたのか、そして何に新たに向き合うことになったのかを明らかにしたい。

## 2. 対象と方法

### （1）事例の概要

岩手上郷分村は、岩手県岩手郡滝沢村（現滝沢市）の岩手山麓に位置し、長野県下伊那郡上郷村（現飯田市）からの分村移民によって入植・開墾が行われた戦後開拓地である<sup>13</sup>。岩手上郷分村というのはひとつの総称であり、もともと国有地であった開拓地は、一本木上郷（通称「先遣隊」、20戸入植、60ヘクタール）と柳沢上郷（通称「本隊」、25戸入植、125ヘクタール）の2地区から成っている。

この開拓地には、元満州開拓団員や満蒙開拓青少年義勇軍出身者が多く入植していることなど、他の戦後開拓地、とりわけ1945年11月に策定された「緊急開拓事業実施要領」によって開拓が進められた地域と共通する性格がみられる。しかしその一方でこの開拓地の成立と展開の過程には、他とは異なる特徴がある。

第一の特徴は、単一の村（本村／母村＝上郷村）からの大規模な分村入植であり、そうした形態を取ったがためにその後も母村からの支援や交流が継続して行われたことである<sup>14</sup>。このことは、開拓地の人々にとっての「家郷」をめぐる独特の意識を醸成することとなった。

第二の特徴は、入植者の大多数が単身の若者たちによって占められていたことである<sup>15</sup>。単身者であることに加え、20代前半の、ほぼ同年齢の入植者が多かったことは、この開拓地においてライフイベントや世代

間移行が同じようなタイミングで行われることを意味する。個人差・家族差はもちろんあるが、ほぼ同一の出生コーホートの人々によって形成された開拓地では、第二世代も同じようなコーホートの人々によって構成されるということである。

第三の特徴は、入植者および世帯の開拓地への定着率が相対的に高いことである<sup>16</sup>。岩手上郷分村では、第一世代で活躍されている方もおり、この現存者と第二世代以降の後継者とを合わせて定着（現存）率を算出すると60.0%となる。単純な比較はできないが、先行研究における都府県の農家継承率（2005年時点）が、農家数について19%、経営耕地面積について62%である<sup>17</sup>ことを考えると、この開拓地では比較的高い割合での継承が行われていることになる。

### （2）調査方法

調査の実施に当たっては、『岩手県戦後開拓史』『岩手山麓開拓史』および飯田市歴史研究所による先行調査等の文献資料を参照したうえで、2011年11月に集団聞き取りの形でライフヒストリーインタビューを実施した。加えて一部の対象者については2013年9月に追加のインタビューを行った。調査項目は、基本属性（出生年）、生育環境（出生地、生業、きょうだい数、出生順位）、教育経歴、職業経歴、生殖家族経歴（夫の職業、結婚年齢、子ども数）、子どもの教育、地域移動経歴、現在の生活（介護、社会活動）、人生を振り返っての評価、の9つである。

### （3）対象者

ライフヒストリーインタビューの対象者は、現在岩手上郷分村に居住する第二世代の女性6名である。うち2人は第一世代の子どもであり、それ以外の4人は第二世代の男性の妻となった人である。現在居住する地区は、柳沢上郷5名、一本木上郷1名である。なお、いずれの対象者についても、同居する第一世代の方々にインタビューを実施しており<sup>18</sup>、以下の分析においてはこの第一世代の語りも参照していくこととする。

表1は、対象者の経歴をまとめたものである。ここから読み取れるライフコースの特徴についてまとめておくことにしよう。

対象者は、両親が第一世代の入植者のなかの年長者（数少ない既婚者）であったC氏を除くと、1950年代に生まれた人々である。出生地については、C氏は両親が開拓団として渡っていた満州で生まれており、そ

表1

| 基本属性 |    |      |      | 生育環境 |               |      |                  | 教育経歴 | 職業経歴      | 生殖家族経歴                                |         |                |                |
|------|----|------|------|------|---------------|------|------------------|------|-----------|---------------------------------------|---------|----------------|----------------|
| 事例   | 性別 | 生年   | 西暦   | 出生地  | 生業            | 開拓農家 | きょうだい数<br>(男, 女) | 出生順位 | 学歴        | 初職以降の職業                               | 夫の職業    | 結婚年齢<br>(男, 女) | 子ども数<br>後継者の存在 |
| A    | 女  | 昭和27 | 1952 | 盛岡市  | 農業（主にりんご、米）   |      | 3<br>(1, 2)      | 2    | 県立高校（農業科） | 事務職（5年）→退職（結婚）→農業（酪農）                 | 酪農      | 23             | 3<br>(2, 1)    |
| B    | 女  | 昭和34 | 1959 | 盛岡市  | 酪農、農業（主に肉牛、米） |      | 7                | 3    | 私立高校      | 事務職（実業団のスポーツ選手7年）→退職（結婚）→農業（酪農、アルバイト） | 酪農      | 25             | 2<br>(1, 1)    |
| C    | 女  | 昭和19 | 1944 | 旧満州  | 酪農            | ○    | 2<br>(0, 2)      | 1    | 各種学校（生活科） | 農業（酪農）                                | 酪農      | 23             | 2<br>(2, 0) ○  |
| D    | 女  | 昭和27 | 1952 | 仙台市  | 自営業（商店）       |      | 2<br>(0, 2)      | 2    | 私立高校      | 販売職（1年）→退職（結婚）→製造業→退職（出産）→農業（稲作）→学校関係 | 会社員     | 22             | 3<br>(1, 2)    |
| E    | 女  | 昭和26 | 1951 | 滝沢村  | 農業（主に米）       | ○    | 2<br>(0, 2)      | 1    | 県立高校（生活科） | 農協職員（3年）→退職（結婚）→農業、パート                | 建築業     | 23             | 3<br>(1, 2) ○  |
| F    | 女  | 昭和26 | 1951 | 滝沢村  | 酪農（開拓当時は出稼ぎも） | ○    | 4<br>(0, 4)      | 3    | 県立高校（生活科） | 事務職（5年）→退職（結婚）→農業（酪農）                 | 農協職員→酪農 | 23             | 2<br>(2, 0) ○  |

※きょうだい数および子ども数は、成年に達した人の数であり、幼少時に死亡した人数は含んでいない。

の他仙台市生まれのD氏を除くと、岩手上郷分村の位置する滝沢村（うちE氏は岩手上郷分村生まれ）、および隣接する盛岡市となっている。

生育環境をみると、家業は1人を除くと農業である。半数の3人は家業が酪農であり、またF氏は滝沢村内の別の戦後開拓地の出身である。本人を含むきょうだい数は2人～7人となっているが、対象者の父ないし舅に当たる第一世代では6～12人であることを考えると少ない。出生順位は長女が2人、次女以下が4人となっている。

教育経歴は、5人が高等学校を卒業している。また、1人が卒業している各種学校も直後に高等学校になっている。対象者6人中4人は農業や酪農に関わる農業科や生活科といった専門学科の出身となっている。

職業経歴をみると、初職が農業というケースは自家の酪農を継いだC氏のみであり、それ以外の5人は高校卒業後に雇用労働者となっている。その5人はいずれも結婚や出産を機に初職を退職しており、その後は家業の酪農に従事する、あるいは別の仕事に就いている。文字通りの専業主婦はいない。

夫の職業は、酪農が6人中4人を占める。それ以外の2人のうち、D氏の夫は会社員で、第一世代の舅が農業を行っており、E氏は夫が建築業を営んでいる。結婚年齢は22～25歳と、それぞれほとんど同じであり、ほぼ同じ時期に生まれた彼女たちは、ほぼ同じ時期に結婚しているということになる。もともと岩手上郷分村に住んでいたC氏と、子どもの出産を期に勤め先を退職したD氏以外は結婚を機に当地に移り住んで

いるので、地域への移入もまた似通ったタイミングであったと考えられる。子ども数は2人ないし3人であり、これかなり近いといえる。したがって、もちろん個別差はあるものの、6人の対象者のライフコースには、いくつかの重なりあう要素があるということになる。

ほぼ同世代といえるこの第二世代の女性たちは、開拓地とそこでの生活をどのように捉えて生きてきたのか。以下では個々の事例に即して考察することにした。

### 3. 生育環境

#### (1) 両親たちの開拓

対象者は、いずれも開拓農家（酪農家）に嫁いできた人々であり、かつ6人のうち5人は農家の出身である。さらに3人は定位家族が開拓農家である。この3人は定位家族経歴においても生殖家族経歴においても「開拓二世」として生きる人々ということになる。ここでは子どもの立場からみた開拓者としての両親の姿を捉えてみたい。

#### ①C氏

C氏は、1944年、満州の水曲柳に生まれた。長野県から開拓団として渡っていた両親にとっては最初の子供（長女）である。翌45年、父親は現地召集を受け、8月の終戦後にはシベリアに抑留された。C氏は母親とともに逃げ、何とか帰国を果たしたが、その過程で生まれたばかりの弟が栄養失調で亡くなってい

る。

1948年8月に父親は帰国・帰郷する。その後1949年3月に両親とともに岩手上郷分村に入植した。C氏はこのとき5歳、母親は妊娠7ヶ月であり、6月には妹が生まれている。C氏にとっての両親の姿とは次のようなものであった。

う～ん、やっぱりとにかくがむしゃらに働いてたことだね。とにかく気をつめて働かないと、体ひとつで働くわけだから、ちょっとサボるとその分仕事が遅れてくじゃない。今なら機械でがさっとやれば終わることもね。だからとにかく年中働いてたの。

子どものころに両親とともに入植したC氏には、当時は独身の若者たちであった第一世代の人々との共同生活の記憶もある。そしてもともと現地で生活していた人々（既存の人）との「格差」を思い知らされることもあった。

ご飯が、じゃがいもの入ったご飯。（ドラマの）おしんは大根だったけど、私はじゃがいも。それも皮剥かないでね、さいの目に切ったのを米と一緒に炊いて、食べてたのね。だから、じゃがいもも大きな小屋にいっぱいあって、それを皮剥くと量減るから、皮剥かないで。

で、おばさんたちがね、木を、丸太を組んで、それを桶で洗ってるの覚えてる。ひとつひとつ洗ってられないから、樽の中で転がして、それを今度刻んで、麦と米と芋と。（中略）

柳沢の既存の人たちが、ひえご飯食べてたの。ひえ飯ね。一回でいいから、私じゃがいもじゃなく、ひえ飯食べてみたいなと。子どもながらにそう思った。やっぱり、じゃがいものご飯は美味しなかった。

## ②E氏

E氏は1952年、岩手上郷分村に2人姉妹の長女として生まれた。E氏の父親は、20歳のときにそれまで務めていた会社を辞め、長野県から岩手上郷分村に入植している。新たな人生を切り開くために、一念発起しての移住だった<sup>19</sup>。家業は農業で、米を専門に作っていた。子どものころの両親の働く姿は強く印象に残っている。

朝から夜まで、開墾地でしたから、開拓地でした

から、山を削って耕して、畑に自分でした土地で、その土地を守ろうとして朝から夜まで働く姿はみていました。

## ③F氏

F氏は1951年、滝沢村の別の開拓地に4人姉妹の3女として生まれた。両親は沢内村からの入植者であり、酪農を営んでいた。経営が軌道に乗る前の様子は次のようなものであった。

あのねえ、開拓者だからねえ、開拓した当時、やっぱりほら、お金が必要で、あの、土方とか、出稼ぎって、日帰りの。うん。あの、なに、現金を得るために、うん。朝出て夕方帰ってくるように。うん。そういう仕事もねえ、してて。昔だからねえ、雑穀も作ってた。（中略）（家族の手伝いは）一番上の姉は、ご飯づくりって、もう決まっていたの。んで、二番目の姉と私はね、やっぱり酪農だから、牛のことを、お手伝いしたり、うん。妹はね、掃除係みたいな。

生産労働の大変さは、もちろん開拓農民に限ったものではない。しかしながら、これらの事例からは開拓一世としての親の姿を子ども心に強く印象づけていたことが窺える。それは単に一生懸命に労働に従事する様子を尊敬する、というだけでなく、代々の継承によって成り立つ一般農家とは異なる開拓農家であることへの独自の意識を生み出している。国有地を開墾することで出発した岩手上郷分村には近隣に以前から農業を営む農家が存在し、そことの対比が「新たな農家」であることを否応なく自覚させていた。親の姿はもちろんのこと、近くにみえる格差が、子どもながらに「開拓者」であることを意識づけていたのである。それは後にみるような開拓二世としての自己認識を基礎づけるものであった。

## （2）子どものころのしつけ

先にもみたように、対象者のきょうだい数は第一世代のそれと比べると少なくなっている。対象者のほとんどは、いわゆる「ポスト団塊世代」にあたるが、1950年代前半まではベビーブームの余波が続いていたことを鑑みても、それほど多くはない。こうした環境のもとでの子どものころのしつけとはいかなるものであったのだろうか。

第一世代の女性への聞き取りにおいては、次のよう

な回想があった。

（自身が受けた）しつけは本当に。（思い出すと）涙が出て来る。厳しかったな。本当に厳しくて、もう評判のおばあさんでね、本当に泣いて。だから子ども時分は波瀾万丈だったの。（中略）厳しいのは評判のおばあさんだった。だからあまり今孫たちに生いたちを話そうと思うと涙が出ちゃって話せないから。（中略）昔の人はどこでも厳しかったから。<sup>20</sup>

当然のことながら、しつけのあり方は家庭によって異なるものであり、またその受け止め方にも個人差がある。しかしながら、第二世代の対象者の回想には、上のような「厳しいしつけ」というものはほとんどみられない。

#### ①A氏

（しつけは）厳しくはないね。怒られたこともあんまりないし。そんな悪いこともしないしさ。ただ遊んで。人のものを盗ったりとかそんなこともないし、そんな悪いこともしないからわからない。きょうだい喧嘩してうるさいって怒られるくらいかな。厳しくなかったよ。

#### ②C氏

山の中だから悪いことをした覚えもないしね。やっぱり、今と違って昔はほら、みんな近所の人たちも自分の子どものような感じでみてくれるからね。帰りが遅くなると、今頃そんなおそくなって帰ってなんていわれてね。（中略）だから、親に別に何かしてもらったりってことがないね。

もっとも、親から守るべきルールをきちんとしつけられたという語りもある。

#### ③B氏

まず一番は、他人のものは取るな。誰もみてないと思ってみているから。そういうことは口酸っぱく。きょうだいが多くて貧乏だから、おそらく羨ましがっていると思って、口酸っぱくいわれていた。

これらの事例から受ける印象は、親よりも地域社会からの影響のほうが相対的に大きいということであり、第二世代においても親からの直接的なしつけの記

憶というのはそれほど明瞭ではない。そのなかで対象者に共通して語られるしつけの方法・手段は、手伝いである。社会のルールやマナーに関するしつけ以上に「労働のしつけ」の思い出は鮮明である。

（手伝いは）すごくしたね。やっぱりほら、今みたいに機械じゃないから全部手仕事だから、忙しいわけ。朝から晩までね。そうすれば、子どもながらもお腹すいても食べるものはないし。だからしかたない。ご飯炊いて食べる、食べてるとか。そうすればほら、親が帰ってきてても食べられるからね。でも、今みたいにスイッチで炊けるわけじゃないから、薪拾ってきて、ストーブで炊いて（食べた）。（C氏）

### 4. 教育経歴

#### （1）進路の選択

対象者は全員が中学校卒業後、高校ないし相当する学校に進学している。そして大半が専門学科へと進学している。第二世代である対象者においても、また対象者の両親を含む第一世代への聞き取りについても、高校への進学に反対された（した）といったことはなかった。対象者の世代の高校への進学率は60%前後から70%台後半に上昇しており、最も若い対象者の中学校卒業時点の進学率は90%にまで達している。

ただし、どのようなコースに進むかについては、家庭的な背景や親の意向というものが表れている。また滝沢村内には県立農業高等学校が設置されており、通学の便を考慮して進学したという事情もあるようだ<sup>21</sup>。また同校は1965年に生活科と寄宿舎を設置し、その直後に進学した対象者もいる。

#### ①E氏

自営学校といって、将来家を継ぐっていう条件で、自分の営業の。そうして、寮生活する学校だったので、農業を専門の学校だったので。家の近くだったし。（中略）一番近い学校だった、それが私には一番だった。

#### ②C氏

（進学先は）勉強よりもなんていうか、生活、生活規則教育っていうモットーの学校で。母がそこに見学に行って、どうしてもそこに入れなきゃ、って。（中学校の）先生は農学校が（いい）な、って

いったけど農学校は女の子があんまり行ってないからって。母はどうしてもそこに入れろって。入れたってね。で、寮に入って、通うに大変だからって。

C氏とE氏は、農家の「あととり娘」である。そうであるためか、家業の継承を考慮した進路選択を行っていたことが窺える。そうしたなかでC氏の事例が印象的なのは、母親が学校を見学したうえで娘の進学先を決定したということである。中学校の進路指導の重要性が高まっていった時期において、親が学校の教育理念に共感し、仕送りをしてまで進学させたというのは、教育への熱心さを感じさせるエピソードといえる。

## （2）高校での学び

対象者が高校に進学した時期は、上記の県立高校の生活科設置にみられるように、「主婦としての農業」に動機づけられた教育課程が整備されていく時期でもあった。同時に様々な検定と資格が学習を枠づけていった。対象者においても、この検定と資格が強く印象に残っている。

### ①E氏

主婦としての農家をこう…成立させる、家事育児、全部教えてもらった。料理は級をとって、料理の食物…1級、2級、3級（という資格）があるじゃない。食物の1級を取りました。

### ②F氏

被服と食物の検定っていうのがあってね、食物はね、いまだに忘れないけどね、お母さんの誕生日に作ってあげたお料理っていうのが検定の題材で、それ、あの、クラスでたった1人、被服と食物で1級まで取れたのが自慢。

また寮に入って学校生活を送ったC氏は、そこでの学びの様子を次のように語っている。

### ③C氏

（学んだのは）やっぱり、住むのに役立つこと。まあ農繁期になれば、近所の農家に実習に行ったり、稲刈りに行ったり、田植えに行ったりとか、りんごもぎに行ったりとか。なんでも百姓のことやらせられたね。学校で。それで、周りには「漬物学

校」とか「百姓学校」とかっていわれたけど、子ども、親にしてみればいい学校だった。<sup>22</sup>

学校生活の記憶は単に学習にのみ尽きるものではない。紙幅の関係で割愛するが、部活動（スポーツ）の経験なども、対象者にとって重要な思い出となっている。また、「中学校の同級生は11人しかいないし、それでそのまま家にいたら、その友だちしかいないでしょ。それが、高校<sup>23</sup>に行ったことによって幅広くつきあいができたし」（C氏）というように、その後の同窓生とのネットワーク形成といった観点からの肯定的な評価もなされている。

家業の継承という親の意向に動機づけられつつ、親世代が経験していない<sup>24</sup>後期中等教育を経て、対象者たちは社会へと出て行くことになった。

## 5. 職業経歴

### （1）就職

対象者のうち、高校卒業後、直ちに家業に従事したのは1人であり、あとの5人は雇用されて働いている。高校での教育が「主婦としての農業」に根ざしたものであるにもかかわらず、ただちにそれが活かされたわけではない。就いた職種としては事務職や販売職が主だったものである。就職時期は高度経済成長が終わる1960年代末であるが、対象者のなかで東京に出て働いた（生活した）ことがあるのは1人だけである。多くは地元で職を得ている。

### ①A氏

ほんとに私保育士になりたかったの。そのなりたいのを通さないでしまったわけよ。そこは悔やむね。（中略）（事務的な）感じのところで働きたい、っていったら先生がね、紹介して、たまたま行ったらそこだったのね。2人で受けたけど私だけ受かったの。もう1人の人は落ちちゃった。運がいいんだよ。

### ②F氏

学校の、高校の時の担任の先生に勧められて、高校の事務で働いた。（中略）あんまりね、都会とかね、ああいうところに行きたいと思わなかったから。就職も何も決めてなかったの、自分では。だから、たぶん、学校の担任の先生が心配して、学校で働いてみないか、って最後にいってくれて。

## ③E氏

（就職先からの）紹介があつて。どこか家ばかりでなく、社会勉強もしたいからと私は思つて。どこか探してたらそこに空きがあつたのでそこに勤めました。

学校縁や地縁といった人のつながりによる就職の他に、高校時代のスポーツの実力を買われてスカウトされたというケースもある。

## ④B氏

うちの会社（実業団チームを有する企業）に来てくれてね。県外からね。けれども、うちの親は県外に行かないでっていったの。（中略）それが一番の決め手。それで県内に。それでT社（就職先）にお世話になって。

こうした対象者の就職は、長期間にわたつての勤続を想定したものではない。実際、初職の就業期間は最長の対象者（B氏）でも7年である。このような就業の形は、もちろん収入を得ることを前提にしているが、その一方で結婚し、生殖家族を形成するまでの間の、第一世代と比べると相対的に長くなった青年期のひとつの形としても捉えることができよう。

## (2) 退職、そして家業へ

学校卒業後、直ちに家業に従事したC氏以外の5人は、結婚を機に退職している。農家出身者の多い対象者ではあるが、農業に本格的に従事するようになったのは結婚して以降のこととなる。結婚については次節で取り上げるが、嫁いでくるということは、新たな生活の地への適応も要請した。

## ①E氏

（田んぼの手伝いは）もう辛かったです。お互い協力し合わないと、農作業機械とか貸してもらったり貸したり、やはり人の手間が一番大変だったかなあ。

もともと岩手上郷分村で育ったE氏にとっても大変な農作業は、それまで農業とは無縁だった対象者にとってはより新鮮なものに映つたようだ。

## ②D氏

（農業や酪農の経験は）なくってね。実家も酪農

とか農業とかなかったから。（実家は）商売していたから、けっこう無関係な感じで…酪農も珍しくて…。

初めて生活する土地であるだけでなく、開拓農業や酪農に対する戸惑いも少なくなかつたようである。

## ③A氏

やっぱりさ、生まれも育ちも違うしさ、環境もさ。全然知らないからねえ。何も（農業に関することを）やらないで突然でしょ。そうだねえ、辛かつたね。今はそんなことないんだけどね。最初は泣いてばかりいた。旦那は勤めてたしさ。（中略）最初はさあ、この畑全部うちのだよ、っていわれたとき、もうびっくり。車で走って歩くんだよ。何町歩ってすごいんだよ。知らないからさあ。今は機械だからいいけど、昔は鎌でみんな手作業でさ。

このようにして対象者たちは「主婦としての農業」に従事していった。結婚後の生活においては、嫁姑関係の苦勞といったことも少なからずあつたことだろう。しかし一方で次のような捉え方をしている人もいる。

## ④B氏

それほど私は苦勞していないな。だってね、周りの人たちもいいしね。ホント、すごくよくしてもらって、やっぱり親たちがうまくこうつき合つてくれているからね。やっぱりそういう点では恵まれているなと思う。

ここでは新たに生活することになった地域への適応がスムーズに行われた要因として、第一世代の関係の良好さを挙げている。同世代の若者たちによって形成された開拓地のリーダー（C氏の父親）が意を注いだのが、仲間との協力関係であり、それは第一世代を対象にした聞き取りにおいても、異口同音に語られるものであつた。そうした関係性は、第二世代にも認識されるものであり、また受け継がれるものであつたと考えられる。

## 6. 生殖家族経歴

## (1) 結婚

岩手上郷分村の第一世代のリーダーであつたC氏の



父親は、青年期に入植した若者たちが、共同経営から個人経営へと移行していくためには結婚が必要と考え、以下のように「お嫁さん探し」に奔走した。

嫁さ、あの娘のおるようなところ行ってね、あの「ベコッコ（牛）みせてくんないー」って行くわけ。すると、「うちには、ベコッコ、いながんすー」っていうわけ。さらに「あの、角のないベコッコよー」なーんて（返す）。それで、その娘をまず紹介してもらってね、それから、こりゃいいなと思うと、それじゃ、いつがいいか、見合いをさせてくれないかってお願いするの。いいよっていうことになるよね、じゃ、いつ行くかね、どこで見合いをすると。いうことでね、見合いをするわけ。

第一世代の妻となった女性の多くは、紹介や見合いという形で結婚した。一方、対象者たちが結婚した時期は、ちょうど見合い結婚と恋愛結婚の比率が逆転した時期と重なる。そして対象者のうち5人は恋愛結婚をしている。

#### ①F氏

（夫は）同級生だ。だからまあ、恋愛（結婚）かなあ。（中略）小学校からの同級生。（中略）同級生でよく知ってるし、お互いに話しやすいっていうのもあったし。（家業が）同じ職業だし、なんも気を遣うこともないかな、って思っただけ。

#### ②E氏

（結婚は）今でいう恋愛かな。青年部みたいな集まりがあって、自然に。（つき合ったのは）1年くらいですか。（中略）反対されたとかはなく、自然に。

#### ③D氏

（結婚は）恋愛。（中略）（親には）やっぱり全然知らないところに嫁に出すっていうことで、やっぱり反対もされたけど…反対っていうか心配。全然もうやったところのないところにやって、簡単に行き来できるところじゃないし、結構山のほうだし。

こうした結婚の形は、上述のような第一世代のそれとは大きく異なるものだったといえる。ただしその分、嫁ぎ先の環境をよく知らないままに移り住むということもあった。加えて、必ずしも慣れていない農業

に従事し、第一世代との関係を構築していくという苦労もあったことだろう。ただし岩手上郷分村には、そうした苦労の支えとなるようなひとつの条件があった。それは第一世代がほぼ同じ世代であったために、第二世代もまた年齢が近い人々によって構成されたということである。つまり、

うちら結婚した年ね、結構結婚がラッシュだったの。部落が。うん、だからね、皆仲良くして、お母さんたち、今（聞き取りに）集まってる人たちもそうだけだね、ここでお茶飲み会をね（する）。（F氏）

同世代のまとまりのよさは、「近所づきあいも和気藹々としている感じで、よそから来たから入りづらいとかもなかったし、自然と入っていった」（D氏）、「寄りがいが定期的にあって、女の人は団結力があって、何かあればすぐ集まる。うちの部落はお葬式とか手伝いに歩くから、そういうのは心強い」（B氏）といった形で対象者が強調するところである。

#### （2）出産と育児

岩手山麓の、気候も厳しい場所に位置する岩手上郷分村での出産や育児は、盛岡市のような市街地と比べると条件的に難しいものと予想される。それでも第一世代が苦労した医療環境などはある程度改善した。

実際、対象者全員が子どもを病院で出産している。第一子は自宅で出産したが、第二子以降は病院で、といったケースはあるものの、全体としては自宅での出産はほぼなくなっていった。

出産場所もほとんどが滝沢村ではなく盛岡市の病院である。出産の医療化、施設化はすでに進んでいたことがわかる。ただし、酪農という仕事は、出産前後の時間的猶予を与えないものでもあった。

#### ①F氏

お産する前日まで、牛飼いはした。おっきなお腹してね。蹴られないようにと思って。だから、バケツとかさ（持って守った）。だから、お産のときはまあ最初は、辛かったといえば辛かったけど、こんなもんかなあと思いながらがんばって産んだけどね。だからね、寝たときも、お産の産休もまあ、1週間か10日か。うちに帰ってきて、そのときだけ。あとは休むってことはまずなかった。（中略）働いている間はおばあちゃん（義母）が面倒みてくれ

て、ミルクとかあげてくれた。一緒に自動車に乗せて、畑に行って自動車のなかで遊ばせたり。(中略)うちに鍵かけて置いていったこともあったけどね。でも、泣いてるべなあと思って、仕事にも身が入らなくて。やっぱり目の届くところ、畑に連れてかなくちやって思ったね。

## ②C氏

やっぱり百姓は仕事があるからね。まず(出産後)休むくらい休んで、3週間とか。嫁さんにくれば実家に帰るでしょ。でも私は帰れないから。家(実家)にいるからね。少しずつ仕事に慣れてあれ(復帰)したけど。無理しないようにとかってもしわねながらも、やっぱり親が動いてれば動かなきゃならないからね。(中略)今みたいにね、託児所だの保育園ってないから、おばあちゃん、私の母親が面倒みてた。

多くの農村の母親たちがそうであったように、子どもと関わる時間を持ちたくても、農業や酪農と育児の両立は相当に難しいものであったことがわかる。出産の環境が整備される一方、託児や保育に関しては、まだ十分な状態とはいえ、他方農業や酪農は機械が導入されたとはいえ、多忙を極めるような時代であった。そうしたなかで育児が行われていた。

## (3) 家業の継承

対象者6人のうち、C氏とE氏の2人は、女性だけのきょうだいの長女であり、「あととり娘」という存在である。C氏は、早くからそのことを意識していたようである。

(あととりという意識は)たぶんあったと思います。だから親にも反発できないで、まあ素直にいたもんだなあと思う。やっぱり妹みでると、こう、やりたいことなんでもやって、で、学校終わって勤めて、勤めながら編み物やってとかってね。編み物やって、教室開いたり、ああいいなあ、って。やっぱりね、家にしぼられるってのは変けども、一応家に残った以上はきちっとやらなきゃいけないと思うからね。(C氏)

第一世代から継承した家業を、自分の子どもたちに継承させることについては、対象者の子どもの進路という視点から捉えることができる。

子どもの進学については、対象者たちは以下のような考えをもっていた。

## ①A氏

高校までと考えていたけど、長男がやりたいことがあるからって上の学校に行ったの。そしたら次々と3人、大学とか専門学校にね(進学した)。平等にやったんですけど。

## ②C氏

おっきいの(長男)は横浜の大学に行って、ちっちゃいの(次男)は札幌の大学に行った。まず(本人が)行きたいっていうからね。今ならやれるかな、と。ほら、あの頃バブルの時期で、まあ出せれたけども。

対象者としては、子どもにつけさせるべき学歴の基準を、自分と同じ高校に置いていたようである。しかし実際には、子どもの大半は高校卒業後、大学や専門学校へと進学している。第一世代の多くが、義務教育(尋常小学校、国民学校)ないし義務後教育(高等小学校、国民学校高等科)で教育を終えているのに対し、第二世代では高校に、そして第三世代では高等教育(大学、短大、専門学校)が中心となる形で学歴が上昇している。また、それを可能していたのは、C氏の語りにあるように、酪農経営の安定やバブル期の好況といった経済的状況であった。

ただし、3世代間での学歴の上昇は、一方で家業の継承の困難さをもたらしもした。

## ③D氏

長男はやっぱりねえ、後を、こっちで家をみてほしいっていうことで、進学するとしたら大分反対ということはあったんだけど、卒業したら地元に戻ってくるっていうことで出したんだけど、やっぱり自分で就職先をみつけてしまって…ダメだったね。

現時点において、家業の後継者が決まっているのは、6人のうち3人である。開墾の労苦を基盤として、継承することが半ば自明のものであった第一世代から第二世代への移行と比べると、第二世代から第三世代への継承はより難しいものとなっているようである。

#### （4）今後の展望

岩手上郷分村においては、C氏の父親をはじめ、第一世代の方々が多く健在であり、酪農や農業の一線からは退いているものの、いまだに元気に活躍されている。その一方で第二世代の人々も還暦を過ぎている。第三世代については、地元を離れている人も多い。

こうした環境のもと、現在、そして今後第二世代が中心的な担い手となるのが親の介護である。この介護は、第一世代が経験していないことである。というのは、長野県出身で非あとりの人々からなる第一世代は、親と同居することがほとんどなく、そのために日常生活のなかでの介護を行うことはなかった。

##### ①C氏

今大変な、そろそろ大変な時期に入って。この間おじいちゃん（父）がちょっと倒れてね。2週間入院したの。（中略）おじいちゃんがない間おばあちゃん（母）もものすごく大変。（中略）今流行の老老介護。自分の体も精一杯になってきたのに、お年寄りの面倒みなきゃっていうのはね。どこの家庭もあると思うけど。（中略）やっぱり親が作ってきた財産をもらうんだから、これを守りながら、この親をみていかなきゃいけないと思って。

第二世代の人々は、第一世代のような、過酷な開墾を直接経験したわけではない。しかし第一世代とは別種の負担がかかってくる。加えて自身にも介護が必要になったとき、果たして誰が面倒をみってくれるかという見通しがはっきりしない対象者もいる。ここにこそ、第二世代固有の問題をみてとることができる。

そうした第二世代の人々の今後の希望には次のようなものがある。

##### ②B氏

うちのお父さんはね、丸太小屋を作って喫茶店をやりたいっていうんだよ。すごい夢のある人なんだ。昔からいっているの。お父さんはそういう夢があるんだけどね。私はいずれ、スローライフっていうか、ゆったりした感じの。なんとなくね、落ち着いた感じのさ（生活がしたい）。

だから、まずは今は一生懸命働いてさ。頑張って働いて、ある程度のときになったならば、息子も後継ぐ意思もないようだから。もはやうちらだけで終わりなのさ、酪農も、まずはね。（中略）後継ぎだから、どうしてもどうのっていえば絶対無理な話し

なんだよ。だから、自分たちがゆとりあるっていうか、ゆっくりできるような、それに持って行くために今は一生懸命頑張るしかないなって。

##### ③F氏

（酪農は）毎日同じ繰り返しの仕事、同じなんだよ。牛に餌やったり、搾乳したり。（中略）家に来ると待ってるでしょ、牛たちが。だからね、定年にして～、って毎日お願いしているけどさ、定年ないじゃん。牛飼いは。ちょっとでも長く今度息子に引き渡すけどね。私とお父さん同い年だからね、60歳になって、まあ年金はまだもらえないけど、一応今度息子にしようっていう話し。

第二世代のなかでは、最も長くこの地域で暮らしてきたC氏は、次のように語る。

やっぱりおばあちゃんたちは体の苦労は、体ではがんばったけども、気苦労は割とないと思う。ほら、どこも同じだけど、後継者にはあのことまでお嫁さんも来てたから、自分が50代、60代になれば仕事を引退できたわけ。（中略）だけど、うちの代になったら、ほら年寄りみなきゃならないし、思うように後継者はいないっていう、どこもそうだと思うけど。後継者でも農家やらないとかね。それだからね、今の人たちは精神的に大変。だから、おばあちゃんたちは仕事引退するのも自由なんだけど、うちらは引退してもまだ親をみなきゃならないっていう仕事があるから、うちの方はね、それがいつまで続くかっていうのが分からないから。だから、やりたいことあっても、まあそれ片づけて、片づけるってば変だけど、それが終わってからなって思えば、今度は自分も年だしなと思ったりしてね。そこは今、そういうことを考えてる。

すでに引退している第一世代とは違い、第二世代の引退の時期は不透明である。対象者のなかには、これから本格的に介護を、という人もいて、そのイメージを具体的に持てないとも語っていた。乱暴ないい方になるが、がむしゃらに開墾に邁進してきた第一世代とは異なった「気苦労」を第二世代は抱えている。そう考えると、第一世代の背負った苦労と第二世代のそれとの重さを単純に比べることはできない。しかも第一世代が築いたものをどうするか、ということについても、第二世代は大きな決断を迫られるのである。そこ

には、「代々継承してきた土地」といった、一般の農家の意識と、「親が切り開いた土地」という開拓農家の意識との間にも相違があり、とりわけ直接開墾を目にしてきた人々にとっては、よりいっそう重たいものとして受け止められている。

## 小 括

本稿の分析対象である、開拓地の第二世代の女性たちは、高度成長期に幼少・青年期を過ごした人々である。そして彼女たちが家業としての酪農や農業に従事していったのは、開拓政策が大きな転換点を迎え、開拓行政が一般農政に吸収された時期でもあった。制度・政策としての開拓は終わりを告げ、少なくともみかけ上は「普通の農村」となっていくなかで、第二世代の女性たちが第一世代の事蹟をどのように受け止め、いかなる部分を継承しようとしたのか、また実際に何が継承されたのかを、地域の特性と対象者のライフコースに即して検討することが本稿の課題であった。ごく限られた事例からではあるが、2つの世代の対比からは、いくつかの特徴がみえてくる。

第一に、同時代の多くの人々に共通する点として、進路選択や結婚に関する相対的な自由が挙げられる。家業の継承については、「あととり娘」としての意識や「農家の長男の嫁」といった意識が認められるものの、進学や配偶者選択には、自分の意思が反映される度合いが強まっていったことがわかる。ただし、こと対象者に関していえば、親世代と比べたときの学歴の上昇は、「主婦としての農業」というものに動機づけられたものであった。

第二の特徴として、同世代によって構成された第一世代と同様に、第二世代もまたほぼ同じような年代の人々で構成されるという、世代の再生産が行われたことがある。このことは、第一世代のリーダーたちが強く心がけた助け合いやつながりといったものを再生産することにもつながったと考えられる。また、こうした地域の条件は、他の地域から嫁いできた人々の適応という観点からも、少なからぬ効果があったといえよう。

もっとも、ある種の横並び意識が、ときとして複雑な感情を生んだり、ある種の競争意識をもたらすこともあったようである。

ここはほら、一緒に入植したでしょ。おばあちゃんから聞いてたけど、競争だったんだって。可哀想

なくらい競争して働いて築き上げたんだと。皆はほら、おじいちゃん（第一世代）は長野（出身）でしょ。長野のお父さん、お母さん生きてる家は（実家からの）援助があったんだって。でもうちのおじいちゃんは両親は亡くなっていて、貧乏だったんだと。おばあちゃんは地元というか、近くから来ているから、皆にはお金くるけどうちにはこないからって、おばあちゃん、すんごい働いたんだと。可哀想だっけよ。（中略）で、競争競争だから、子どもたちも同じくらいに生まれてるじゃない、結構。（中略）で、孫も皆同じころ持ってる。だから、私すごい感心する。今ならお嫁さんいないんだよ。でもあの頃、よく皆ね、貰ってさ。すんごいと思う。

このような競争意識は、聞き取りのなかに強く表れるものではなかったが、潜在的に各家族の経営を支えるものであったのかもしれない。

第三に、第二世代における第一世代の労苦の内面化がある。上の引用にもみられるように、第二世代からは第一世代に対する尊敬の念がたびたび語られる。それはときとして「親の世代から比べると…」といった、自己を卑下した表現をとともなうこともあるが、家業に従事するうえでの強い動機づけになっていることを対象者に共通して感じ取ることができる。

第四の特徴として、第一世代からみた第二世代には半ば自明のものであった家業の継承が、第二世代から第三世代へという流れのなかでは不透明になっていることが挙げられる。農業における後継者問題は、何も開拓地に限ったことではない。しかしながら、第一世代の開拓の労苦を目の当たりにし、それが身近なものとなっている第二世代にとって、継承の問題は一般農家以上の拘束性をもつと考えられる。その意味では、第一世代以上に第二世代の人々はこの問題の重さと直面することになる。加えて、第一世代の人々が経験していない介護という課題を引き受けていかなければならない。

加えて、第二世代の人々にはもうひとつ、向き合わなければならない大きな困難がある。東日本大震災における福島第一原子力発電所の事故によって、岩手上郷分村の乳牛にも放射能検査が行われ、また、風評被害による売り上げの減少もあるという。第一世代が経験した戦争と同じように、第二世代もまた、それまでの蓄積を奪われかねないような事態に直面しており、家業の継承を含めたライフコースやファミリーコースの見直しを迫られる状況にある。

開拓地の第二世代は、第一世代が切り開いた土地を継承し、その経験を受け止めながら生きている。こうした第二世代の生き方は、第一世代の人生の写し鏡のような性格を帯びている。このような意味において、戦後開拓は、政策上の終焉こそみたまもの、今なお人々にとっては複数の世代にわたっての「生きられた(る)経験」である。

## 注

- 1 代表的なものとして、以下の諸研究が挙げられる。
  - ・野添憲治『開拓農民の記録―農政のひずみを負って―』NHK ブックス、1976年。
  - ・原田由起乃「戦後開拓地における集団の組織化と変容―岩手県松尾村前森山集団農場を事例として―」『人文地理』第50巻2号、1998年。
  - ・道場親信「戦後開拓と農民闘争―社会運動の中の「難民」体験―」『現代思想』2002年11月号、2002年。
  - ・同「『復興日本』の境界―戦後開拓から見えてくるもの―」中野敏男・波平恒男・屋嘉比収・李孝徳編『沖縄の占領と日本の復興―植民地主義はいかに継続したか―』青弓社、2006年所収。
  - ・同「『戦後開拓』再考―「引揚げ」以後の「非／国民」たち―」(道場親信・小山田紀子・川喜田敦子「離散者が問う戦後世界像―その包摂と排除に見る植民地主義の継承―」)『歴史学研究』846号、2008年所収。
  - ・大竹晴佳「野原地区における開拓の展開―戦後開拓の30年とその後をめぐる一考察―」『新見公立短期大学紀要』第29巻2号、2009年。
  - ・青木健「外地引揚者収容と戦後開拓農民の送出一長野県下伊那郡伊賀良村の事例―」『社会経済史学』第77巻2号、2012年。
- 2 森武磨編『戦後開拓―長野県下伊那郡増野原― オーラルヒストリーからのアプローチ』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、2013年。
- 3 同上、P.5。
- 4 一例として、永江雅和「戦後開拓政策に関する一考察―もうひとつの農地改革―」『専修経済学論集』第37巻2号、2002年など。
- 5 蘭信三「満州開拓団を母体とする戦後開拓集落における「共同性」―熊本県東陽開拓農協の事例―」『ソシオロジ』第33巻1号、1988年。
- 6 北崎幸之助「戦後開拓地の変容過程におけるアクターの果たした役割―茨城県南部大八洲開拓農業協同組合地区を例として―」『地理学評論』第75巻4号、2002年(のちに同『戦後開拓と加藤完治―持続可能な農業の源流―』農林統計出版、2009年に所収)、伊藤淳史「加藤完治の戦後開拓：福島県白河開拓における共同経営理念をめぐる」『農林業問題研究』第1巻1号、2004年、同「戦後開拓における加藤完治の営農指導―入植者の反応に着目して―」『村落社会研究』第13巻1号、2006年、三好豊「戦後高冷地におけるリーダーのライフ・ヒストリーの分析―戦後開拓への諸契機の解明―」『農業史研究』第42号、2008年。
- 7 高瀬雅弘「戦後開拓地のライフヒストリー(2)―岩手県上郷分村における若者たちの職業経歴の再構築過程―」『弘前大学教育学部紀要』第107号、2012年。
- 8 永江雅和「戦後開拓政策と社会関係資本―兵庫県草加野開拓地の事例―」『社会関係資本研究論集』第3号、専修大学社会知性開発研究センター/社会関係資本研究センター、2012年。
- 9 この点において、森編、前掲書は、第二世代の今日の経営までを射程に入れた希有な成果である。
- 10 労働の実態は必ずしもそうではないにもかかわらず、戦後の性別役割分業のイメージとの結びつきから、男性が主、女性が従という形で捉えられてきた傾向があるように思われる。
- 11 森編、前掲書は、開拓地における女性のライフヒストリーについても分析を行っている(松下里織「開拓と女性」)。ただしフィールドや対象者の制約もあって、世代間の比較対照は行われていない。
- 12 高瀬、前掲論文。
- 13 入植・開墾に至る一連の経緯については、森武磨・齊藤俊江・向山敦子「戦後岩手県上郷分村調査報告」『飯田市歴史研究所年報』第6号、2008年を参照。
- 14 森・齊藤・向山、前掲論文、P.208。2013年まで、飯田市から市の広報誌が郵送され続け、また相互訪問の機会が設けられるなど、「母村」と「分村」のつながりが維持されていた。
- 15 この点については高瀬、前掲論文を参照。
- 16 1982年時点で、離農した世帯(開拓地から転出し、籍者が変更しているケース)は一本木上郷1戸、柳沢上郷8戸であり、定着(現存)率は両地区を合わせると80.0%(岩手山麓開拓史編集委員会編『岩手山麓開拓史』滝沢村役場、1982年所収の「入植者および在住者名簿」より算出)である。20世帯以上からなる岩手県の戦後開拓地の定着(現存)率は平均69.3%であることを考えると、比較的高いといえる。また飯田市歴史研究所による2007年時点の調査によれば、最初の入植者45人のうち、現存者16人、死亡者21人、うち二世が農業を継いでいる人11人、離農者6人、茨城への再開拓2人となっており、現存者と後継者とを合わせると、定着(現存)率は60.0%となる(森・齊藤・向山、前掲論文)。
- 17 澤田守「労働力の変化と農業就業構造」小田切徳美編著『日本の農業―2005年農業センサス分析―』農林統計協会、2008年所収。
- 18 高瀬、前掲論文を参照。
- 19 高瀬、前掲論文、PP.21-22。
- 20 第一世代の対象者(1926年生まれ)の語り。
- 21 対象者に限らず、女性の進学をめぐるのは、要求される学力やカリキュラムといったことに加えて、通学時間がかからないことを親が重視するケースがまみられる。
- 22 C氏が通ったのは盛岡市の当時各種学校であった盛岡生活学校である。同校の性格や特徴については、牛木

純江「セツルメントにおける人間形成—東北農村生活合理化運動に注目して—」木村元編『近代日本の人間形成と学校—その系譜をたどる』クレス出版、2013年所収において分析がなされている。

- 23 学校はC氏の卒業後、高等学校になっており、インタビューにおいても「高校」として語られている。
- 24 第一世代の対象者13人の学歴は、高等小学校（国民学校高等科）がほとんどであり、1人のみ新制中学校を卒業している。
- 25 高瀬、前掲論文を参照。
- 26 高瀬、前掲論文、P.24。
- 27 本稿では、紙幅の関係で対象者の生殖家族に関する意識を分析することができなかった。しかしこのテーマは戦後の近代家族のありようを考えるうえで重要であり、他日を期したい。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたっては、岩手上郷分村に現在もお住まいの第一世代・第二世代の方々に大変お世話になりました。なお現地での聞き取り調査は弘前大学教育学部社会調査実習「公民演習Ⅰ・Ⅱ」の一環として行われ、参加した学生諸君の協力も大きなものでした。記してお礼申し上げます。

## 附記

本稿は、平成25年度日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号24730410）による研究成果の一部である。

(2014. 1.14 受理)